



Notules Chimériques

Kazuo Watanabe
Librairie Kawade

1950

渡邊一夫著

まぼろし雜記

河出書房刊

昭和二十五年八月二十五日印刷
昭和二十五年八月三十日發行

まほろし雜記

定價 貳百七拾圓
地方賣價 貳百八拾圓

著者 渡邊 一 夫

發行者 河出 孝 雄
東京都千代田區神田小川町三ノ八

印刷者 井關 好 彦
東京都千代田區神田錦町三ノ一

東京都千代田區神田小川町三ノ八

發行所 株式會社 河出 書 房

振替口座東京一〇八〇二
電話神田(25)三二七四

目

次

I

書齋の一隅から

三

パリの思ひ出

六

音痴音楽談

一五

II

若い友への手紙

三五

青春と僕

三六

僕の語學修業

四九

III

狂氣について

六五

教養について

六九

宿命について

七三

暴力について

七八

文法學者も戦争を呪詛し得ることについて

九〇

人間が機械になることは避けられないものであらうか？

一〇三

エラスミスムについて

一二八

IV

汝は市民なりや	一三七
平田篤胤の「大和魂」について	一四三
ガーター勳章について	一五三
忌むべき郷愁 ノスタルジヤ について	一六三
無力な國民の願ひ	一七三
じめじめした話	一八五

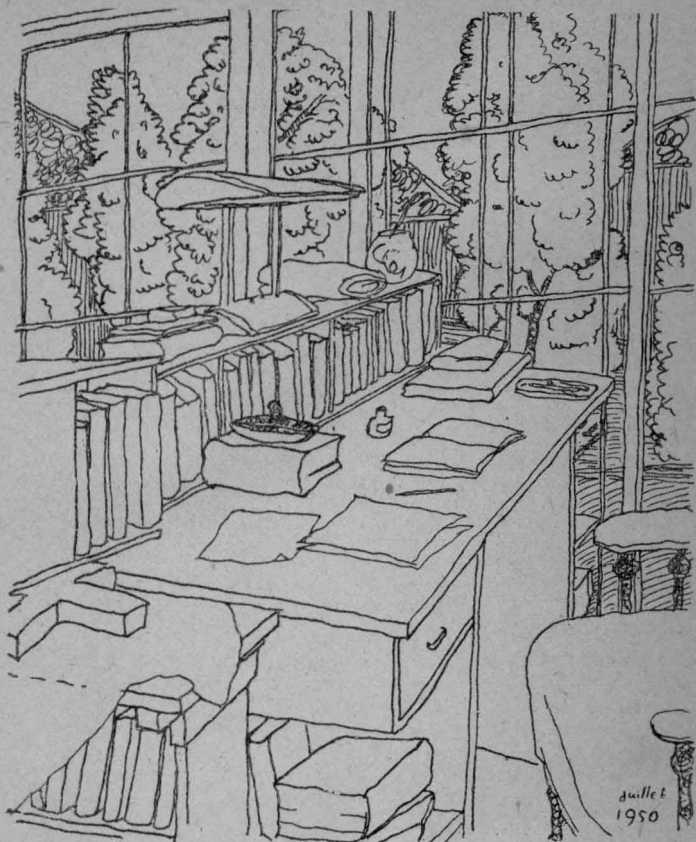
V

一九四六年の跋	一九
一九五〇年の序文	二〇六

VI

夢 パロール・ジュレ 二 夜	二二三
凍つた言葉の傳説	二二八
お 伽 噺	二三六
後 記	三二九

I



書齋の一隅から

このどこか間の抜けた下手な繪は、僕の書齋の一隅のつもりである。夏になると、机を南側へ移すのが長年の習慣である爲、机は南側の縁近くまで進出してゐる。それをやゝ斜から描いたのである。書齋は二階にあるので、空がよく見える。風通しがよく、夏でも風さへあれば、實に涼しい。出不精なせもあるが、暑い思ひをして避暑に行く氣になれぬのもその爲である。あまり本を書齋へ持ちこみすぎたので、階下の建附けが狂つたこともあるが、今では、すっかり建附けのはうがあきらめて、狂はなくなつてくれた。尤も、既に、階下の部屋の唐紙障子を二回ほど大工に削つてもらつてゐる。まだ、母が在世してゐた頃だから、もう十五年以上も前のことにならう。

戦争の時には、繪の正面に見える木の下まで火がきた。幸ひなことに家は無事だつた。ありがたいことと思つてゐる。

僕は、この土地で、つまり今住んでゐる家が建つ前に建つてゐた家——母方の祖父の家——で生れた。だから、何となくこの土地、この家で死にたいと思つてゐる。戦争中、屢々さう思つたが、今でもさう思つてゐる。しかし、これは贅澤な言分だらう。どこでもいい、疊の上で死ねれば人間は幸福なほうである。それ

だのに、その疊の在所を更に指定することは増上慢かもしれない。世のなかの人々が皆、好きな土地で、疊の上或はベツトの上で死ねるやうになる日が、人類に訪れてくるものであらうか？「誕生の地ですから終焉の地にもしたいのですが！」と言ふと、大抵の人は、「大丈夫でせう」と、甚だ心もとない調子で慰め(?)てくれる。

左手の木の繁みのなかに二階建ての家がある。現在は新興成金かもしれぬ人の工場になり、製本か何かをやつてゐるらしく、時々ガタン／＼と音をたて、僕を惱ます。敗戦後は、一時男女共學の商業學校(?)になつてゐた。それがいつの間になら工場になつてしまつたのである。學校を經營した人は、かなりまうけたかもしれない。日本の教育界の過半は、教育を商賣と思つてゐる人々によつて占められてゐる。これもやむを得ない。戦争直前には、恐らく同じ經營者によると思はれるが、無線電信學校になつてゐた。ツートン、ツートンといふ音を毎日聞かされてゐた僕は、風に乗つて耳もとへ迫つてくる「歡送」の絶叫に、たゞ／＼悲しい思ひをしてゐたやうである。僕の少年時代には、この建物は常盤舎といふ書生さんの寮であつた。この寮舎のことは、明治文學史の一頁か半頁ぐらゐを必ず占めるらしい。正岡子規や川上眉山なども、この寮にきてゐたといふ話を母から聞いたやうな記憶がある。

繪の中央、丁度硝子戸の向ふに、木のやうなものがくしや／＼と描いてあるが、桐の木のもりである。

僕は、四季のうつりかはりによつて、この桐の木に見られる變化を今まで、毎年毎年毎日毎日見守つてゐたわけだ。一番印象的なのは、早春、うつすら赤味を帯びた圓い新芽が、裸形の枝にぼつりぼつりと出てくる姿と、晩秋、老いしけつた葉が白い裏をのぞかせながら、風にそよぐ姿である。初春の桐は、ひたむきな顔

をしてゐるし、晩秋の桐は、シニカルな表情をしてゐる。秋の夜々など、ふと外の闇を眺める時、荒々しい風になぶられながら、この桐が白い齒をむき出して、から／＼と乾いた音を立てつつ嘲笑してゐるのが見える。ぎよつとして、一寸こはくなる。

あと何年、あの桐を眺めて、この書齋に居られることであらう。無理に生き通しても、限られた年數である。どうも桐のはうが長命らしい。僕がこの世から消え去つた後も、あの桐は毎年秋の夜、白い乾いた笑ひを笑つてゐるであらう。と思ふと、あたり前の話だが、ほんの少々變な氣持にもなる。ほんの少々といふのは、僕の死後のことを正確に考へるだけの想像力がないからである。つまり、今かうやつてゐる僕が消えるといふことは、確かのやうでもあり、合點がゆかぬやうでもあるからだ。人間の思考には、何か限界があるものらしい。あゝ風が吹いてきた。桐が笑ひ出した。

(juillet 1947)

パリの思ひ出

僕は小さい頃から、センチメンタルであつた。今も、表面は、いかにも尤もらしい顔をしたり、シニカルなことを言つたり、ソフィステケートションを氣取つたりするらしいが、(らしいといふのは、さういふ評をする人々がゐるからだ)ほんたうは、依然として、センチメンタル或はサンチマンタルなのである。サンチマンタルだといふことは、よいことかわるいことか知らない。たゞ省て、どうもさういふ名稱でしか呼ばれない傾向が僕にあるらしいと思ふだけである。

かうした僕には、色々妙な癖があるやうに考へるが、次のやうな癖もある。昔もあつたし今もある。

……何か、楽しい、うれしいことがあつたとする。さういふ場合に、僕は、すぐさま、その楽しくうれしい瞬間は長つゞきしないであらうし、一晩明けたら、確實に、この楽しくうれしい事實・現實は虚無のなかへ没し去つてゐるだらうと思つたし、現にさう思ふのが常である。だから、何かうれしく楽しいことがある際には、僕は、いつもは、らくしてゐるし、どことなく浮かぬ顔になる。勿論これは、人間としての修養ができてゐない證據で、實に恥かしいと思ふ。すべてが、いづれ空に歸することは、自明の理であるから、さればこそ、うれしいこと楽しいことがあつたら、思ふ存分うれしがり楽しむのが恐らく悟達態度であら

う。僕の如きは、つまらぬサンチマンタリズムに永劫に囚はれてゐる下根の人間に外なるまい。

かうした奇妙な癖に絡みついた、もう一つ別な奇妙な癖がある。それは、何か楽しい気分になつた折、例へば、親しい人々と風光の勝れた風景を前にして、美酒を汲むといふやうな場合、僕は、眼の前にある平凡な岩の窪みに生えたペンペン草とか、足もとにある瀬戸物のかけらとかいふものを眺めながら、かうやつてゐる自分は、永遠に二度とないことにならうし、かうやつてペンペン草を眺め、瀬戸物のかけらを見つめてゐる自分の姿を、いつか僕は思ひ出して、失はれた時の意識を強くするであらうと、思ふのである。そして、事實、その時思つた通りに、今まで僕は、失はれた時を、どうにもならぬやきもきした氣持で見送つてゐる。つまり、楽しい時に想像した通りのことを、後で思ひ出してゐるのである。その點だけは僕は一度も間違つたことはない。

この「想像」は「思ひ出」と完全に一致してゐて、誤謬や錯誤は絶無である。そして、この意識は、死とつながる。僕はいつれ死ぬであらう、といふ考への確實きはまる證據が與へられてゐるからである。たゞ死後、僕には意識はあるまい。従つて、現在必ず死ぬと考へてゐる僕の氣持を、死後僕は思ひ出す術はあるまい。死によつて、すべては終るからである。

パリでの生活は、たゞひたすら楽しかった。それだけに、以上述べたやうな妙な感情が常につきまとつて、僕を離れなかつた。……「かうやつてゐる自分が、日本へ歸つた後のことを考へてゐる姿を、いづれ日本へ歸つた後の僕は思ひ出すであらう」といふやうな一寸やゝこしいことを、いつも僕は考へてゐた。そして、それは正しかつた。僕は、現在あり／＼とパリ時代の僕の姿や氣持を思ひ出し、あの時代に、事毎に、右のやうに考へてゐたことを思ひ出すのである。

○

パリへ着いた日の夜は、ソルボンヌ廣場のヴラン書店の向ひ合はせにあるホテル・セレクトで送つた。七月の終りだつたと思ふ。マロニエもブラターヌも青々と繁つてゐた。夜の闇に閉された窓の外には、こんもりとした葉影があり、葉なみの間から桃色に染められた空や、ネオンサインや蒼白い街燈がちら／＼見えた。パリに着いたといふ氣持に興奮して、なか／＼寝つかれないでゐるうちに、朝の三時になつてしまつた。三時といふことは、すぐとつときのソルボンヌ大學内の教會の時鐘によつて判つたのである。靜かな夜のカルチェ・ラタンの一隅の生溫かい夏の空氣に乗つて、ソ・ミ・ソ・ミ・レ・レ・レと、澄んだ鐘の音がひびいてきたからである。そして、鐘は、十二時の時には、レの音で十二鳴つたし、一時の時には、一つ鳴つたからである。

僕は、その時、この鐘の音は、いづれ永久に失はれるであらうし、さう思つてゐる自分、ホテル・セレクトの四階の一室の薄明のなかでさう思つてゐる自分を、いづれ日本へ歸つた僕は思ひ出すであらうと思つ

た。そして、それは眞實であつた。今でも、あり／＼と思ひ出せる。あの部屋の壁紙の色や、サイドテーブルのしみや、夜闇のなかに見えたドアの隙間の光まで思ひ出せる。失はれると思つたものは、確實に失はれてゐるのである。

○

パリの思ひ出は、數限りない。そして、その一つ一つに、以上のやうなサンチマンタールな感情が必ずついてゐる。だから今、思ひ出を書けと言はれると、何か心が痛むし、――更に、お前は必ず死ぬといふことを思ひ出せ、と言はれるやうな氣がしてならない。

あの町も、この町も、あの書店も、この書店も、あの劇場も、この劇場も、あの先生も、この先生も、あのひとつも、このひとつも、皆僕から豫定通りに失はれてしまつた。そして、僕もいづれは豫定通りに、僕から失はれてしまふのであらうか……。

○

パリを永久に離れたのは、冬のある日の夕方だつた。リヨン停車場から汽車が動き出した時、僕は、しびれたやうな氣持で、灰色のプラットフォームが後へ後へと滑つてゆくを見つめてゐた。プラットフォームが、ふいになくなり、闇が現はれた。がたん／＼といふ車輪の音が激しくなり、螢光を放つ蛇の腹のやうな線路が、何本となく、うねりながら後へ後へと走つて行つて、それもほどなく消えてしまつた。紫色や黄色

の標識燈も、飛んで行つた。そして、桃色に染められた夜空をバックにして黒い塊のやうな町の姿が遠くに見えた。これが、パリの見納めだつた。それ以來、僕はパリを見ない。あつけない別れであつた。眠尻がじいーんと熱くなつただけである。しかし、これは、一種の慰めにもなるかもしれぬ。なぜならば、僕が僕自身に別れる際にも、同じくあつけない別れをするであらうと思ふからである。その上、その時には、眠尻がじいーんと熱くなる氣力もなくなつてゐるであらうから、なほ更にあつけなからう。

○

こんな妙な感慨は、勿論僕一人の専賣ではなく、誰しも持つてゐるものであらう。僕がたま／＼思ひついて下手な文章に託したにすぎまい。しかし、かうした人間の心持をそつとして置いてくれないやうな人間は、當人がどんなによいことをするつもりでも、非人間的な行動を必ずすることになるだらう。尤も、今のべたやうな心持だけに沈淪するのは、滑稽だし、邪惡ですらあるが、かういふ心持を、少くとも他人に認めてやることは、人間である以上せねばならぬことだらう。

○

今夜は、入梅のやうな雨が降り續けてゐる。パリでは、こんな雨は降らない。僕は一度も雨傘を使つた覚えがない。雨は降るが、決して日本の雨のやうに、しつこく、或は猛烈には降らぬのである。これは、地理的條件の故で、誰の罪でもない。たゞ、雨がしと／＼と、或はじやあ／＼と降らねばならぬやうな條件に左

右される國に住む人々は、自ら考へ方や感じ方が異つてくることも争はれないやうである。僕にしてみても、『雨瀟々』の作家に對して感ずる共鳴のはうが、ジードやヴァレリーに對する共鳴よりも、或は身についてゐはせぬかと思ふ。

今夜、世界最大の村と言はれる東京都に降る雨よ、遠慮なく降るがよい。紳士淑女がごみを一杯につめて通りを悪くしてしまつた下水孔から汚水をあふれ出させ、泥の出たペーヴメントの泥をます／＼出させるがよい。そして、じめ／＼したところに、色々様々なかびを發生させるがよい。そして、そのかびのなかには、この世界最大の村落たる東京都の市民の生命を脅すものも發生させるがよい。日本人の思想にも、しとしとじゃあ／＼と雨が降つてゐる。玉碎紳士も、鬭争學生も、そこに生ええたきのこであらう。僕はそこに生えたペンペン草にすぎない。邪魔になつたら、いつでもむしり取られるだけの運命しかないのかもしれない。

○

パリ祭——つまり、バスチーユ牢獄解放記念日の前夜、パリの町では、吉例の行列がある。大革命當時の服裝をした老幼男女が隊伍をと／＼のへ、手に手に松明をかざしつゝ、ねり歩くのである。僕は、この行列を、カルチエ・ラタンの大通り、サン・ミシエル通りで見たが、妙に陰惨なものも感じた。パリ祭とは、この陰惨な事件の記念日であるらしい。フランス人は、この事件によつて、一段と進歩し、一段と幸福になつたかもしれないから、感謝もするだらうが、あの際に行はれた多くの悲慘を誇りとはしまいし、二度と同じ悲慘事をくりかへすのはいけないと思つてゐるであらう。これは、パリ祭・パリ祭と言つて騒ぐ日本人には恐